

アリストテレス的現在主義：変化と持続の問題をめぐって

佐金 武 (Takeshi Sakon)

大阪市立大学大学院文学研究科

我々はしばしば時間を空間と類比的に捉える。このような考えを「時間の空間化」と呼ぼう。もっとも、この用語は異なる分野では異なる意味をもちうる。たとえば、物理学の世界ではいわゆる「ミンコフスキー時空」を連想させ、大陸哲学の文脈ではベルクソンが批判した悪しき思考法と結びつく。本発表において私は、四次元的なブロック宇宙から出発するすべての見解は、時間の空間化に依拠するものとみなす。「永久主義」と呼ばれる理論では通常、過去、現在、そして未来のあらゆるものを含む静的なブロック宇宙が想定される。また、「動くスポットライト説」においては、永久主義的な時間ブロックに加えて動く今が導入される。さらに、「成長ブロック説」によると、ブロック宇宙それ自体が存在しない未来に向かって絶えず増大する。このように、静的であれ動的であれこれらの理論はどれも、私が意図する意味で時間の空間化を前提とする。

本発表の主たる目的は、この時間の空間化をいかにして回避すべきかを示唆することである。そのために私は、時間の空間化を含まない「現在主義」の一つのバージョンを提示したい。現在主義は一般に、「すべてのものは現在にある」、あるいは「現在しか存在しない」というテーゼとして定式化される。しかし、このように定式化される現在主義は多くの批判を招く。そうした批判なかでもここで検討したいのは、レイニンガー [Leininger 2015] が提起する「変化の問題」と、タラント [Tallant 2018] が懸念する「持続の問題」である。私の目論見では、時間の空間化を回避するための重要な鍵は、現在主義を新たな観点から捉え直したうえで、「時間とは運動の数である」と考えたアリストテレスの洞察と組み合わせ合わせることである。彼の時間論を参照することにより、時間を空間化することなく、現在主義にとって問題となるメトリックとしての時間をうまく扱う視座が得られる。

議論の流れは次のとおりである。まず、現在主義に対して提起される二つの反論を紹介し、現在主義が進むべき道を素描する。次に、現在主義を「時間の空間化」に対するアンチテーゼとして再定義することを試みる。しかしながら、先の二つの反論に答えるためには、現在主義においてメトリックとしての時間がどのように捉えられるかを示さ

なければならない。ここで、アリストテレスのアプローチが大いに役立つ。時間に関するアリストテレスの考えを改めて検討し、現在主義にも利用可能な仕方ですそれを拡張することを試みる。